

愛知淑徳学園は一昨年(平成17年)の2005年、100周年を迎えました。昭和36年に開学した愛知淑徳短期大学は、62年に4つ目の学科としてコミュニケーション学科を設置します。当時、短期大学では全国初の学科で、内外から大きな注目を浴びました。卒業生に学園での思い出を語っていただくシリーズの第10回は、コミュニケーション学科第1期生の渡辺倫代さんに登場していただきました。



## 愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科 第1回卒業生(昭和63年度卒業)

**渡辺 倫代さん**(旧姓:服部)

昭和44年生まれ。現在37歳。  
平成元年3月に卒業後、証券会社へ入社。  
現在は業務管理課の課長代理を務める。

## コンピュータの授業では、 プログラミングが必須科目でした。

公立高校3年の時、四年制大学の経済学部か経営学部を目指して勉強していたのですが、担任の先生から、愛知淑徳短期大学に新しくコミュニケーション学科ができると聞きました。私は初めて聞くその学科名にとっても興味を持ち、何か変わったことが学べるのではと期待を膨らませて、学校推薦を受けて入学しました。

コミュニケーション学科というのは、やはり当時としては珍しかったようです。人からあまりにもよく「何を勉強しているの」と聞かれるので、うまく答えられない私たちは、先生から「広くはマスコミュニケーションから、身近なところでは対人関係について演習を含めて勉強しています」と教えていただき、その通りに答えていました。



2年生の4月、コミュニケーション学会設立総会のパーティー後、先生方と運営委員のメンバーで記念撮影

実際に勉強の仕方ほかの学科とは異なっていたと思います。たとえば「家族ゲーム」という映画のビデオを見て、映画の中の家族は何がおかしいのか家族内コミュニケーションの問題を見つけた。調査法の授業では、自分たちが気になるテーマ約30問を書いたアンケート用紙300部を配布、回収、データを分析したりなど。自分で考え、行動して結果を出すという授業がとても楽しかったです。

コンピュータ教育に力を入れていたのも大きな特徴でした。またパソコンが普及していなかった時代に、学生一人ひとりにコンピュータを与えられ、太郎やプログラミングの勉強をしていたのです。コンピュータームは土足厳禁で、靴を脱いで入っていました。



卒業式当日、記念会堂の前で。右が渡辺さん



コミュニケーション学会報「C-ing」。誌名は公募で、コミュニケーションの頭文字のCと、当時出ていた就職情報誌「B-ing」をもじって命名。上は創刊号、下は第6号。内容は、ゼミ紹介、学術情報、お店情報など幅広い

2年生からは、いろいろな種類のコミュニケーションがある中、私は人間の行動に興味を持ち、松尾貴司先生の「ノンバーバル非言語的」コミュニケーションのゼミに入りました。卒論のテーマは「対人魅力が非言語コミュニケーションに及ぼす影響について」でした。

学園での一番の思い出は、コミュニケーション学科の広報誌を作成したこと。1年生の10月にコミュニケーション学会設立の話があり、誘われて運営委員になりました。18人が企画、広報、編集の3班に分かれ、私は広報班に。月に度、編集会議で各自テーマを決め、期日までに原稿を作り、印刷、綴込みをしました。先生たちがいらした準備室に、授業が終わると集まり、

場所とパソコンをお借りして夜遅くまで製作していました。

1期生で先輩がいなかった私たちは、講義の内容やゼミ情報などをすべて先生方から情報を聞き出して記事にしていました。時には試験情報も…。新しい学科で若い先生が多かったせいか、時間外に相談に行っても熱心に教えていただきました。それ以外にも、先生方と星が丘ボウルへボウリングへ行ったりと、本当に楽しかったですね。

就職活動の時期はバブルがはじける直前の絶頂期で、学校の掲示板にはたくさん求人情報が出ていました。私は母が銀行に勤めていたこともあり、金融に絞って活動していたのですが、運よく第一希望の証券会社から内定をいただくことができました。

入社後、短大で学んだことはさまざまな面で役に立ちました。広報班にいたことでOA機器の操作や資料作成は得意でしたし、パソコンの授業のおかげで文書や表の作成ができるのも重宝がられました。お客様や社内の方との接し方についてうまくコミュニケーションが取れたのも、もちろんゼミで学んだ対人魅力(印象形成)の研究のおかげだと思っています。

数年前、仕事に役立てようと、スクールに通ってファイナンシャル・プランナー(AFP)の資格を取得しましたが、現在その上位資格であるCFPを目指して勉強中です。社会人になってもずっと勉強は続いていますね。(談)